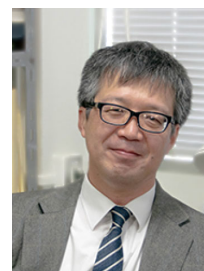


## 新型コロナウイルス流行以降の研究活動

大阪大学 産業科学研究所

藤塚 守\*



先週（2月中旬）、著者が所属する大学院の修士課程の発表会が対面で行われた。無事発表を終え、現在修士二年生は修士論文を作成する段階となり、指導する立場としてとりあえずホッとしているところである。

今回修士論文発表会に臨んだほとんどの学生は2021年4月に大学院に入学した学生である。2020年初頭から新型コロナが流行したことを考慮すると、彼らは大学四年次の研究室への配属以降ずっと新型コロナ流行下で研究活動をした学生ということになる。すなわちオンラインで授業や雑誌会・セミナーをこなし、また、研究活動も「密」を避けるための自宅待機に加え、感染や濃厚接触による登校停止や研究室の一時的な閉鎖などから、研究に従事する時間を確保することに苦心されたことと思う。学会発表も従来とは異なり、オンライン化により対面での発表経験が乏しかったことは否定できないのではないかと推測している。従ってあらゆる面で新型コロナウイルスの流行に影響を受けた世代ということになるかと思う。

このような状況下において、これらの学生に対し、先生方は従来に劣らない教育や研究指導を行うため多大な尽力をされてこられたと思う。私の所属している大学院においても、その時々的情勢に応じ、授業や研究室活動の基準を柔軟に変更してきた。もはやあらゆる活動のオンライン化はすべての教員にとって必須の技術となっている。そのような努力もあり、冒頭の修士論文発表についていえば、新型コロナウイルスの流行の影響をもろに受けた学生諸君の発表であるが、過

去の修士論文発表に比肩するレベルに達していたと思う。卒業していく学生が、今後それぞれの分野において諸先輩に劣らず活躍してくれることを願うばかりである。

さて、現段階において第八波はほぼおさまり、現在は小康状態といったところだろうか。種々の活動に対する様々な制限は緩和されつつあり、マスク着用の要請もゆるくなるようである。授業や研究活動でも2023年度は対面での活動が増えるであろうし、多くの学会で対面での発表や懇親会などが以前のように行われるようだ。新型コロナの流行で途絶えがちであった他機関の研究者との往来も復活してきた。一介の研究者としては制限の緩和をうれしく思うとともに、コロナの影響で遅れている活動を取り戻したいと思っている。さて、ここ数年のコロナへの対策により、われわれはネットワークのメリットを大幅に生活・活動にとりこむこととなった。従来対面での開催が当たり前だった会議でも、オンラインで十分役割を果たせることをすべての人が体験した。ネットワークを介した情報共有、安全な大容量ファイルの送付は今となっては当たり前である。在宅勤務による通勤時間の削減および労働時間の効率的な利用や旅費の削減などもネットワーク利用の恩恵の例といえる。さらに海外の研究者のオンラインによる講演会や海外の大学生に対するオンライン授業などが容易になるなど、より活発な活用が増えてきており、もう以前の活動様式には戻れない面がある。その一方において、オンラインを多用することによりコミュニケーションが希薄とならないように心掛けなければならないとも常に感じている。真に新型コロナの流行が収まるかはわからないが、それにより得られた新たな活動方法をいかに活発な研究活動や生産性の向上につなげられるかが問われているのではないかと感じている。新型コロナウイルスの蔓延は間違いなく「禍」であったが「禍を転じて…」である。

Research Life after the Outbreak of COVID-19  
Mamoru FUJITSUKA\* (SANKEN, Osaka University),  
〒567-0047 大阪府茨木市美穂ヶ丘 8-1  
TEL: 06-6879-8495, FAX: 06-6879-8499,  
E-mail: fuji@sanken.osaka-u.ac.jp